
血肉の刃

joker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血肉の刃

【Zコード】

N6893M

【作者名】

joker

【あらすじ】

ゴシックロリータを纏い、片手には常にバイオリンの入ったバイオリンケースを持っている少女。だがそれは外だけ。本当は　血肉で構成された、鉄色の刃だった。ホラー×アクション、開幕！

プロローグ

夢を見た 少女の夢。

小さく、美人で、凛とした背中。
黒く派手な服を着て、片手にはバイオリンケースを持っていた。

そして少女はただひたすらに僕の名前を呼ぶんだ。

「晃…晃…」

切なく綺麗な音色のよひな声。

手を欲する少女に、僕は手を差し出せなかつた。

辛也會

心細い。

切なさや
悲しみ。

感情が涙に変わった時、僕は静かに歩きだす。

切なさを紛らわすよつて、少女を追い払う。

切ない音色。
哀れな音色。

いつしか僕の目からは、少女への情が 流れていた。

出会い。

ぴぴぴぴぴぴぴ

目覚まし時計の音で目が覚める。

セツトした時刻は6時半。つまり現在時刻は6時30分だ。

「最悪な夢を見たな…」

小さく涙を流す少女から逃げていた。

「無理ねえか」

だってその少女、泣いていたとはいえば、片手に血液の垂れた刃を持つっていたから。

カーテンを開け、空を見上げる。

雲ひとつない、快晴だった。

朝食を採り、高校へと向かう俺 鳳春樹。

入学して間もない頃でまだ不慣れではあるが、ある程度のとりまきもできた。

この調子で高校生活は終了する はずだった。

俺が普通に歩いていると、柔らかいものを蹴った気がした。

…え？？

はっとして下を見ると、そこにはゴシックローラーを纏つ少女が倒れていた。

「…は？」

何が何だかさっぱりの俺は、きっと幻覚だろうと思いつつ、そのまま通り過ぎようとした、が。

どうやら幻覚ではなかつたらしい。

通り過ぎた瞬間、足首を強く掴まれた。

「最近の若者は冷たいな。こんな可愛らしく派手な格好をした少女を放つておくなど、常人のすることではあるまいに」

お前の格好が原因だよ。

やつはいつも思つたが、何か言ひ返されてしまつた気がしてしまふ、言えなかつた。

あれ？？

ここへ、どこかで見たような気が…。

「ん？ おー、貴様、私と会つたことがあるか？」

「うう、こつも同じことを思つてこたらしく。」

俺は「ああ」と曖昧に返したが、田の前の少女は「そつか」と納得したよう戻してきた。

「……」

脳内に浮いたのは、夢で出てきた少女。

刃を握っているはずの左手にはバイオリンケースが握られているが、姿は、そつくりそのままだった。

「まあ、いいか！」

少女は満面の笑顔で言い、俺の手を引く。

「お、おこつ！？」

「ここであったのも何かの縁。
学校なんてサボって私の買い物に
付き合つがいい！貴様、名は？」

一方通行する少女に名乗る名などない。
だから俺は、名前を偽つた。

「オズ」

「オズか。日本人で珍しい名だな」

少女は感心したように言い、再び笑顔で「私は」と切り出す。

「名前はない」

「…ない？」

「私は生きている、が、

私の姿を、臨覗むことができんだよ」

寂しそうに言つ少女に、俺は何を返したのだらうか。

神の必然。

学校の登校時、俺はこの少女と出会った。

夢で見たあの少女の鏡のように、似ているその黒服を纏う少女。俺はどことなく不安を感じていた。何か災いが起こるのではないか、そんな匂いが漂っている。

「おい。オズ君、私はどちらの服が似合つかな？」

服をかざし、猫のように笑む彼女。

俺は適当に黒いネグリジェを指差した。

少女は「そうか」と納得し、選ばれた方の服を戻し、選ばれなかつた服を籠の中に入れる。

…いや、じゃあなんで俺に聞いた？

「おい」

「なんだい？」

「お前、周りの奴からは見えないんだろう？だったらその籠とか服とか会計とか金とかどうすんだよ？」

俺が小声で人に聞こえないように言つと、少女はふと笑う。

「偶問だな、オズ君。私に触れたならば、その物までを見えなくなる。心配無用ということだよ」

「……お前は、人間か？」

不審に思わずざるを得なかつた。

見えない人間。

触れたものを見えなくする人間。

そんな人間、いるわけがないのだから。

「ふふつ。滑稽なものだねえ。そうだよ、私が人間だ」

「ふうん」

そうとは思えないけどね。

「私が人間だ」。随分はつきり言うものだから、否定なんて、出来やしない。

お前が人間なら、お前が見える俺はなんなんだ。

何が人間で何が人間じゃないのか、俺はさっぱりわからなかつた。

夢で出てきた刃の少女。
現実で模倣された刃の少女。

バイオリンの少女。

それはまるで神が仕組んだ歯車のよつと、
ぐるぐると、
ぐるぐると、
歯をたてて廻り
す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6893m/>

血肉の刃

2010年10月10日16時08分発行